

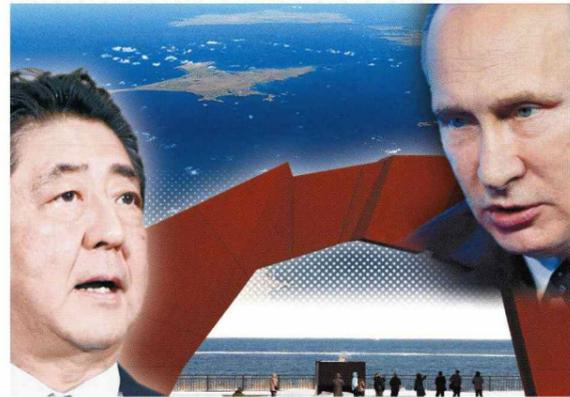
# 日ロ関係と領土問題を読み解く

## 首脳会談前に新刊次々

安倍晋三首相とロシアのプーチン大統領による日ロ首脳会談が15日に山口県長門市、16日に東京で行われる。両国の間に横たわる北方領土問題は解決に向けて動き出すのか。首脳会談を前に、出版が相次ぐロシア、北方領土関係の本を紹介する。（東京報道文化班）

9月以降、プーチン氏が表紙を飾る本が次々に発行された。プーチン氏の長期政権は「強いロシアの再建」を提唱してきた。だが、国内では圧政を敷き、経済の低迷や内政の矛盾が目立つ。木村汎「プーチン」（藤原書店 5940円）は、プーチンのロシアを多角的に検証することで、政権の舞台裏を浮き上がらせた。

下斗米伸夫「宗教・地政学から読むロシア」（日本経済新聞出版社 3024円）は、保守主義を強めるプーチン政権を解明



する上で文明論・宗教的なアプローチを試み、本質に迫る。小泉悠「プーチンの国家戦略」（東京堂

出版 2376円）は、西側の発想とは異なるプーチンの目から見た世界を分析。著者が専門とする軍事を切り口に、ロシアの行動原理を探っている。

チャールズ・クローヴァー「ユーラシアニズム」（越智道雄訳、NHK出版 3564円）は、ロシア独自の地政学的イデオロギーに注目。その実態から政策、戦略の真の狙いがどこにあるのかを読み解く。北方領土そのものを題材にした本も出版された。

名越健郎「北方領土の謎」（海竜社 1728円）は、国後、択捉両島で発行されている地元紙を基に、四島の実相に迫った。ウクライナ東部の内戦から逃れた多くの移住者がいることや、犯罪、事故が多発している現状が分かる。

このほか、新刊ではないが岩下明裕「北方領土問題」（中公新書 907円）も、領土問題への理解を深める上で欠かせない一冊だ。

## 専門家2人が選ぶ3冊

日ロ関係や北方領土問題を知るための3冊を、専門家2人に紹介してもらった。

- 「北方領土の基礎知識」 石郷岡建、黒岩幸子著（東洋書店新社、1296円）
- 「北方領土交渉秘録」 東郷和彦著（新潮文庫 761円）
- 「日ロ現場史 北方領土—終わらない戦後」 本田良一著（北海道新聞社 2268円）



### 名越 健郎さん

（拓殖大教授）

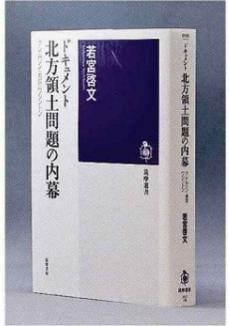
プーチン大統領訪日控えて出版された「北方領土の基礎知識」は、領土問題の論点を簡潔

に整理し、四島の歴史の変遷をたどった好著だ。石郷岡建は交渉史を振り返り、法的論議ではなく、「日ロの国家戦略が一致した時、解決の扉が開く」と指摘。日ロ双方の主張にそれぞれ不備もあることが分かる。黒岩幸子は、1956年の日ソ共同宣言調印後、フルシチョフ指導部が歯舞、色丹の住民を撤去さ

せ、引き渡しに備えた秘話などを紹介。知られざる千島の歴史を浮き彫りにする。「北方領土交渉秘録」は、領土交渉の当事者だった東郷和彦が、外交官人生を振り返りつつ、守秘義務のぎりぎりのところで交渉の真相を明かす実録物。興味深いエピソードが満載で、返還のチャンスは5度あったと方説。行間に志と教養の高さがうかがえる。鈴木宗男事件が身にかがぶのを避けて海外生活を送った著者の復活の書となったが、2001年のイルクーツク会談を「北方領土が最も日本に近づいた」と書くなど、自ら手掛け

た交渉への思い入れが強く、やや客観性を欠く記述もある。本田良一の「日ロ現場史」は、北方領土をめぐる戦後の多くのドラマをルポ風に再現。漁業や拿捕・密漁、領土交渉を取り上げ、領土問題に翻弄される元島民や漁民の証言を丹念に拾った。暗い肉声が続く、気が重くなるが、戦後、北の海で繰り返された悲劇を今こそ直視すべきだろう。

- 「日ロ関係史 パラレル・ヒストリーの挑戦」 五百旗頭真、下斗米伸夫ほか編（東京大学出版会 9936円）
- 「ドキュメント 北方領土問題の内幕」 若宮啓文著（筑摩書房 1944円）
- 「ロシア 闇と魂の国家」 亀山郁夫、佐藤優著（文春新書 810円）



い期待が生まれつつある。今回の日ロ首脳会談は、必ずしも領土返還がメインテーマではないが、日本側のほとんどの関心はむしろそこに集中している。安倍、プーチン政権のいずれも高いレベルで安定し、持続可能性という点から見て今以上に理想的な環境は見いだしたいというのがその理由である。ただしこの見方には、日本側の若干独

り善がちな解釈も含まれている。日露平和条約がロシアにどれだけ有効かという「向こう側」からの視点が欠けているのだ。そもそも、当事者たる両政権の安定は、必要条件ではあっても十分条件ではない。アメリカで親口政権が誕生しつつあることが、今回の会談の風向きに微妙な影響を投げかけている。

さて、日ロ関係の過去、現在、未来を考えると格好となる入門書、しかも現役の書物となる

ストーリーの挑戦」を挙げたい。第二に、領土問題を考える良書として、米ソ間の権力闘争などのより広域的視点から考察した若宮啓文「ドキュメント 北方領土問題の内幕」が基本文献である。さらにロシア人の精神性は何か、というより根本的な問いに踏み込みたい向きには、今でも入手しやすいということで、佐藤優と私の対談「ロシア 闇と魂の国家」を挙げる。

### 亀山 郁夫さん

（名古屋外国語大学学長）

プーチン来日を目前に控えて日ロ関係の将来をめぐって明る

とかなり数が限られてくる。第一に、右のように相互性の観点を担保しつつ250年に及ぶ日ロ関係の歴史を立体的に記述した「日ロ関係史 パラレル・ヒ

かめやま・いくお 1949年生まれ。専門はロシア文学。近著に「ゴルバチョフに会いに行く」